

浄土

monthly JODO

10

2021
October

令和3年

vol.87

no.957

〔浄土アーカイブ〕

「きたれ、光の中へ」 真野正順を語る 赤坂明翔



東京五輪 石田一裕

〔微風吹動〕

〔新連載〕
あなたもお寺のCIO（最高情報責任者） 小路竜嗣

法然上人讃仰会

古物漂流

文と写真●三宅政吉
(グラフィックデザイナー)

連載8 真空管

骨董市に行くと、ときどきおかしなものを売っているのに出くわす。ブルーシートにずらりと満鉄（南満洲鉄道。大日本帝国の中国侵略と占領のシンボル）関連の品物が並んでいたりする。客車のシートに取り付けられていた灰皿や、車掌の腕章や制帽、路線図、行き先表示板、笛などなど。いったい誰が買うのだろうと不思議な感慨にとらわれるが、鉄ちゃん（鉄道ファン）が歴史的守備範囲を広げることもあるのかもしれない。

他人様の趣味についてあれこれ書くのは差し控えないければならないと思うが、おかしな連中である。

その隣に、これもまたおかしなものがずらりと並んでいた。写真の真空管である。使用済みのものもあれば、箱に入ったままの未使用のものもある。

ガラスで作られたものや、錆びた金属が好きなので思わず手に取った。なかなか面白い。レトロなSF感覚である。壊れやすいガラスと、錆の入った金属の対比が不思議な味わいを醸し出している。箱に入ったものも含めて六個ほど買い求めた。合計一五〇〇円ほどだったか。

小学生の頃、近所の高校生が自分で作ったという真空管ラジオを見せてくれたことがある。いくつもの真空管がむき出しに並んで、小さなスピーカーからラジオ放送

が途切れ途切れに聞こえてくる。すごいなあと心底感心したものである。といって自分も作ってみようとは思わなかったのは、私に理科系の資質が欠けていたからなのだろう。

さてこの真空管、買っではみたもののこんなものを買ってどうするんだよと、自分の中から声が聞こえてもくるが黙殺。まあ、満鉄グッズを買う鉄ちゃんを笑う資格は、私にないことだけは確かである。



真空管とは、内部を高真空とし、電極を封入した中空の管（管球）のことで、陰極から陽極に流れる電子流を制御することによって増幅、検波、整流、発振などを行うことができる。1904年にジョン・フレミングが2極真空管を発明。60年代以降トランジスタに取って代わられるが、現在でもオーディオ装置などで使用されている。

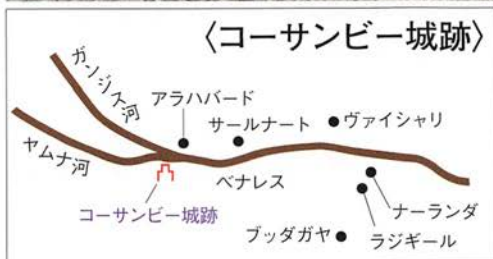
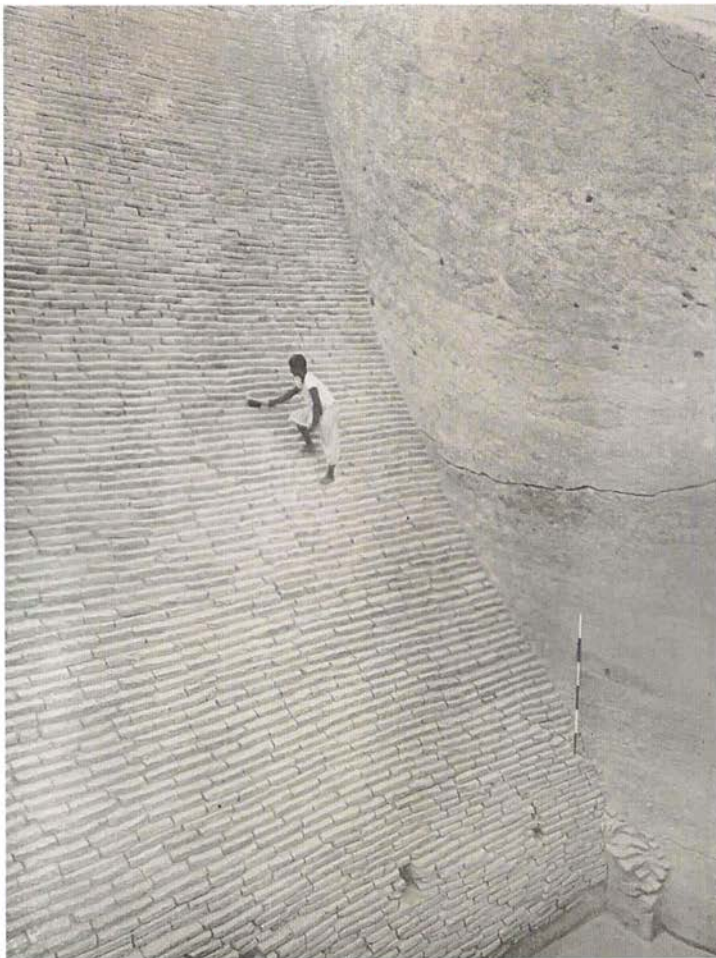
インド渡航歴40回超！

佐藤良純の No. 15

インド・釈尊あれこれ紀行

コーサンビー城の遺跡

コーサンビー城の城壁跡。急勾配で高かったことがうかがえる



インド渡航歴40回超！

佐藤良純のインド・釈尊あれこれ紀行 No.15



コーサンビー城跡からの出土品。
二頭の動物を従えている

人身御供の場所を示す鷲のマーク



城壁跡からヤナム河を見下ろす



釈尊の足跡、仏跡は主に北部インド、ガンジス河沿に広がる。八大仏跡に入らないコーサンビー城遺跡は、釈尊が夏の安居（長雨の期間、同じ場所に留まること）を九回行った仏跡である。ベナレスの上流、ガンジス河とヤナム河の合流地点に近い水運に便利な地点にある。コーサンビーの起源は古く紀元前2000年にはできた大きな都市群の一つであった。ヴェーダ時代には既に存在し、後にはヴァツサ王国の首都となった。釈尊が滞在したところはウダヤナ王朝の支配下にあり、仏典には多くの人々がこの地を訪れたことが記されている。そして、紀元前3世紀のマウルヤ王朝、5世紀のグプタ王朝でも重要な都市、特に東西貿易の拠点として栄えた。

そして、コーサンビー城の遺跡には注目すべき遺跡が四か所ある。巨大な城壁、鷲のマークで表される人身御供（ブルシヤメータ）の跡（鷲のマークで示される）、ゴースータ精舎な



コーサンビー城跡と案内看板



ど三つの精舎、アショーカ王造立の石柱である。城壁はヤムナ川に面し非常に高く、その急な傾斜で水害や敵の侵入を防いでいた。

この城壁や構築物を守るために、狭い空間に生きたままの人間を閉じ込める人身御供が行われた。人見御供を出した家族は膨大なお札を受け取った。アラハバード大学の博物館に保存されているレンガは今でもリンが燃えている証拠に薄い光を放っている。

三精舎にはそれぞれ寄進した人々の名前がつけられている。クックタ、ゴースータ、ヴァリカでいずれも有力な市民だった。

アショカ王が建立した石柱の石頭はすでにないが、石柱にはコーサンビーで起きた戒律解釈の顛末が彫られている。

釈尊滅後にコーサンビー仏典結集と呼ばれる集会も行われた。その二度目に、一部の比丘たちが手洗いの水を水鉢に残し、物議を醸し出した。水鉢にボウフラがわき蚊となり、

アショーク王造立の石柱と筆者。十数年前の記念写真



佐藤良純

大正大学名誉教授

さとう・りょうじゅん 昭和7年東京生まれ。大正大学同大学院、インドデリー大学院に学ぶ。昭和34年より大正大学で教鞭をとり、教授、学科長を経て、平成14年退職、大正大学名誉教授となる。インドへの初渡航は昭和38年、以来インドへ訪れること、40有余回。著書に『ブツダガヤ大菩提寺』、『釈尊の生涯』など多数。

マラリアを感染させ人命を奪うからである。水鉢に水を残すことは一部の戒律には許されていると正当性を主張する比丘たちと、許されないと反対する比丘たちと二つに分かれた。水を残しても良いと主張した比丘は最終的に破門されたが、コーサンビーの信者による仲介で和解した。釈尊による仲介説もある。このコーサンビー遺跡は1949年からアラハバード大学のシャルマ教授によって数回にわたって調査された。その結果、大きな煉瓦の城壁は紀元前11世紀から紀元前9世紀にわたって造られたことが炭素測定法（木材に残る炭素の放射エネルギーで木材の年代がわかる）で確認されている。また、宮殿あとに残る建物は紀元前8世紀から建てられていることが分かった。宮殿中央にはホールがあり、支配者の住居があった。宮殿内の建物はレンガや石を用いて建てられ漆喰で固められる丁寧な作りだった。

浄土

2021/10月号 目次

連載 インド紀行⑮「コーサンビー城跡」	佐藤良純	1
「きたれ、光の中へ」真野正順を語る	赤坂明翔	6
寺々刻々⑭ 意外な若者の死生観	鶴飼秀徳	12
ぶつぶつ放談「仏教×マンガ③」	佐山拓郎 工藤量導 大橋雄人	16
新連載 あなたもお寺の CIO(最高情報責任者)	小路竜嗣	23
微風吹動「東京五輪」.....	石田一裕	26
連載小説「式子内親王遺文」第6回	石丸晶子	30
江戸 日本の街道探訪 第8回	森 清鑑	38
漫画「浄土宗のお祖師様」三祖良忠上人④	ぐんじまん	45
編集後記		48
表2 古物漂流⑧	三宅政吉	



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

表紙写真＝若林隆壽

アートディレクション＝近藤十四郎

「きたれ、光の中に」 真野正順を語る

赤坂明翔

真野正順先生が法然上人鑽仰会の創始者であることは、今日までの月刊誌『浄土』、或いは真野龍海台下を通じて、存知の方も多い。しかしその実、正順先生が一体どういう人物で、どんな人生を送ってきたかは、宗内でもあまり知られていない。ましてや私などの平成・令和世代にとつては雲を掴むにも等しい。それ故、書き記さなければいけないと切に思い、筆をとっている次第です。



◇ 英国紳士、ステッキ、フロックコート。

真野正順先生は実にハイカラな人物であつたらしい。病弱で細身な体でありながら、宗教・哲学・文学・芸術を十分に摂取し、決して能弁ではなかったが、人を惹き付ける魅力があつた。中村辨康先生を野性味あふれた「剛」とするならば、さしずめ先生は紳士で上品な「柔」の人物であろう。正順先生を語る文章はどれも良い香りが漂ってくる。――

いや一寸待つてほしい。若き頃の先生は思うよりずっと血氣盛んな人物ではなかったのか。事実、自身でも「仏教復興の氣運に、血の氣の多い私は、法然上人鑽仰会」を企画することになった」と言っているではないか。今こそ英国紳士の中に隠れた情熱を追つてみたい。

◇ 大正六年（一九一七）、東京帝国大学に通

う正順先生に思わぬ出来事が起こった。師である真野順戒僧正の遷化、それに伴い芝天光院への晋山。だが悪いことは続くもので大学卒業の翌年、母はる子を失った。先生は養子ではあったが六歳から愛情深く育てられ、二十八歳で一人寺に残された。この時、ふと師が壮年の頃に京都に遊学したことを思い出し、真似をするように今度は自らが欧州への留学を目指した。帝大哲学科を首席で卒業し、さらに天光院はかつて浄土宗学本校が置かれた学問への因縁が深い寺だけあって、自負心を持つ若き俊才が浄土宗留学生に選ばれるまで、そう時間はかからなかった。



大正十年(一九二二)夏、伸びた髪にボマードを塗りつけ、真新しい背広姿の正順先生、二十九歳。ポケットに片手を入れ、颯爽と神戸港から旅立った。

——やっと欧州に来た。(中略)道にして過ぎゆく端麗な女人、町を出て爽かなるノートルダム丘上の眺望、私の自動車が駆って壮麗なる公園に入ったときは、歓喜はその頂に近づいた。僕の心身は今度の旅を楽しんでいる。安心してくれ給へ——マルセーユにて——

それから英国に渡り、オックスフォード大学で宗教哲学の研鑽を積んだ。生来の育ちの良さに加え、本場英国で紳士ディンティルマシヤの嗜みを身に付けた。その後、ドイツに渡るも関東大震災の報を受け、帰国を余儀なくされた。



大正十五年(一九二六)、正順先生は大正大学の教授に就任する。当時の正大には東京帝大宗教学の大先輩、椎尾辨匡・矢吹慶輝の両教授が君臨し、特に矢吹先生とは宗教学研究室で主任・副主任の関係にあつて、大いに社会的宗教に対する薫陶を受けた。また天光

院では土曜会（読書会）を開催し、三佐藤・賢順・良智・密雄―や中村康隆を始め二十代の若手僧侶らと交流し、時にはスキーを楽しみ、時には仏教界の行く末を語り合った。ただこの頃から持病の肺を悪くし、書斎の布団の上で過ごすことが多くなった。



昭和九年（一九三四）、日本仏教界に転機が訪れる。それまで明治新政府の廃仏毀釈や西洋思想の輸入により、仏教は影を潜めてしまっていた。それが昭和に入り満州事変や五・一五事件、国際連盟脱退など社会情勢が目まぐるしく変化する中、今一度、日本人の精神として仏教が見直されるようになった。そして友松円諦師や高神覺昇師のラジオ放送「聖典講義」で一気に爆発した。世にいう昭和九年の「仏教復興」である。しかしながら、いつの時代も伝統教団の認識と行動は鈍い。い

ち早く友松・高神の両師が察知し、超宗派の「全日本真理運動」を計画した。もちろん正順先生もこれを見逃さず同調した。

一方、浄土宗宗務所では教学部長・辨康先生が一人気を吐いていた。「わが浄土宗でも、この仏教復興に乗じて策を講じるべきだ!」と叫び、東京の第一線で活躍する中堅・若手僧侶らを集めて何度も会合を開き、意見を募った。

――正順先生には葛藤があった。それは法然上人や浄土宗に対する想いである。友でありライバルだった友松師と共に、仏教復興の氣運に任せ、超宗派の真理運動を進めていた。だが辨康先生の祖師法然上人への情熱が、正順先生を一路「法然上人鑽仰会」という新計画へと突き動かしたのである。病弱な体であることも忘れ、青春の血潮がみなぎり、四十二歳で宗門を先導する覚悟を決めた。こうし

浄土宗宗務所主催で昭和9年秋、増上寺で開催された第一回浄土宗布教幹部講習会。前列左から2人目より右へ、藤井実応師、真野正順師、中村辨康師



て真野正順・中村辨康の名コンビが生まれ、賛同する有志僧侶を募り、法然上人鑽仰の御旗を社会に打ち立てていくのであった。

× × × × ×

昭和十年（一九三五）五月、月刊誌『浄土』が創刊された。その記念すべき巻頭講話が、真野正順先生の「きたれ、光の中に」である。自己を超えて、大いなる生命の中に身を托する。それが「信念」の生活です。「信念なくて、人は真に生きる事はできない。」とはこの理であります。

人間は、色々な「縁」に支えられ生きている。けれど一度「縁」が乱れれば、自分の立場・環境・財産等を失ってしまう。時代が変わってもこの本質は変わらない。だから人間は不安になり、社会や自然の荒波の中で、自己の殻に閉じこもりがちになる。しかし正順先生は、「事業の中に精一杯、白熱的にブツ

かったとき、心の底からこみ上げてくる感動」のような、誰もが経験のある自己を忘れて何かに打ち込んだときこそ、返って自分自身や「縁」がよく活きてくると説く。つまり自己を超えて、大生命に身を任せることが、「信念」の生活であり、本当に安心して生きる道となるのである。



思えばいつだって人生で痛感することは、心底打ち込めるものがある幸せ、ではないだろうか。ただ正順先生がここで読者に問うているのは、その有無ではない。その存在が常に私たちのすぐ近くにあるということである。輝く生命はたえず我等の頭上にある。光りに満つる浄土は既に其処にしまえられてある。我々はただそれに入れればよい。絶えず、仏を念ずるときに、わが生活は、おのずから其限りなき生命の光に潤うの

である。

この輝く大生命が阿弥陀仏であり、光に満ちる浄土の世界は目の前に広がっている。けれど、一切の衆生を救わんとする生命の光を信じて、身を任せるには、逆に己の光を消さなければならぬ。正順先生はいう、念仏とは己を滅する道である。それこそが法然上人のいう「愚に還れ」の意味であると。今私たちに必要なことは、自己の殻に閉じこめることでも、ましてや自我を剥き出しにして他者とぶつかることでもない。ただひたすらに「念仏の生活」をすることである。念仏こそが、己を空しくして真実に己を活かす―自ずから豊かになり光に融けゆく―浄土信仰者の道であると、法然上人の教えを広く大胆に捉えて、正順先生は説いたのである。



「きたれ、光の中に」

正順先生はこう私たちに呼びかける。しかし、「念仏の生活」^{ねんぶつ せいかつ}をすることは簡単ではない。それゆえ彼らは、法然上人の大きな人格に触れて、知らず知らずのうちに念仏信仰に入らしめるために、法然上人鑽仰会を組織した。一人では長く続かないことでも、志を同じくする者が集まれば、自然と心持ちが違ってくる。鑽仰会では、僧俗問わず会員一人ひとりが隣近所に呼びかけて支部（会員五人以上）を作り、そして支部同士が集まってより大きな聯合支部を作った。正順先生は、個々では小さな波でも、互いに連携すれば、皆の「念仏の生活」^{ねんぶつ せいかつ}が大きなうねりとなり、ひいては地上に浄土の影を映して、よき社会を築いていくことになる。と確信していた。先生もまた念仏が、生きる、教えだということを確かに伝えているのである。



正順先生、そして龍海先生、紡がれたバトンの光は、これからも受け継がれていきます。どうぞよろしくお願い致します。

月影のいたらぬ里はなけれども

眺むるの心にぞすむ

——法然上人——



晩年、天光院の書齋にて

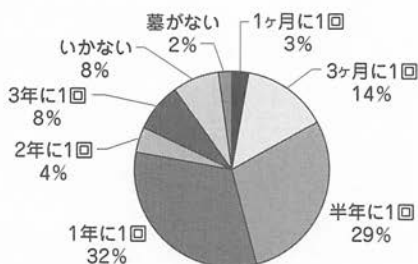
眞野正順 まの・しょうじゅん

明治二十五年（一八九二）～昭和三十七年（一九六二）。東京都生まれ。天光院二十一世。文学博士。大正大学学長。昭和一八年（一九四三）、浄土宗教学院初代院長となり、組織宗学大成のため宗門、学界の一体化に努力した。また法然上人鑽仰会を設立し、月刊誌『浄土』を創刊した。世寿七十歳。著書に『仏教における宗観念の成立』（理想社、一九六四）、『日本人の信仰と生活』（法然上人鑽仰会、一九六六）等がある。

『お寺の日本地図 名刹古刹でめぐる47都道府県』著者

鵜飼秀徳の

寺々刻々

急増する
「墓じまい」に逆行！
意外な若者の死生観

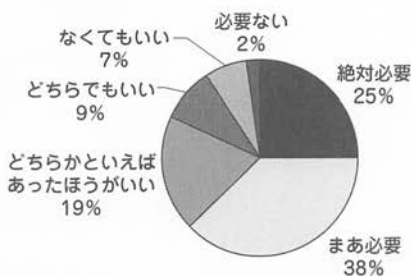
問1 墓参りをどれくらいの頻度ですか

コロナ禍における大学前期の授業が終わった。私は佛教大学と東京農業大学の2校で非常勤講師をしている。

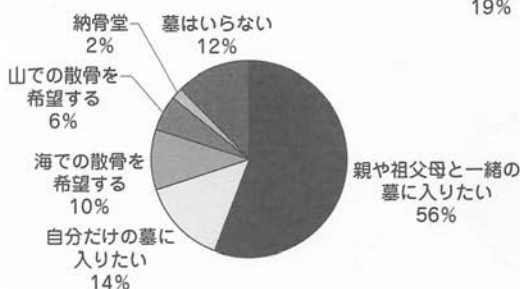
東京農業大学では過去3年間にわたって、「若者の死生観アンケート」を継続して実施してきた。その調査項目「墓参り」と「葬式」についての結果が出た。有効回答数は855人。20歳前後の「今どき」の若者の葬送観は、なかなか意外な結果であったので、ここで紹介してみたいと思う。ちなみに佛教大学では浄土宗寺院の子弟が混じっており、死生観に関する質問ではバイアスがかかってしまうため、同調査は実施していない。

まず、「墓参りの頻度」について聞いた。だいたい1年に1度行くという回答が最も多く3割（32%）を占めた。「年に2回以上」は46%。うち3%はひと月に1度のペースで行くという。墓参りが日常習慣化している若者も一定割合いた。

一方で、「3年に1回程度」が8%、「行かない」は8%であった。ただし、地方都市から東京へ進学した学生が今後、社会人になってから、どれだけの頻度で故郷



問2 墓は必要だと思うか



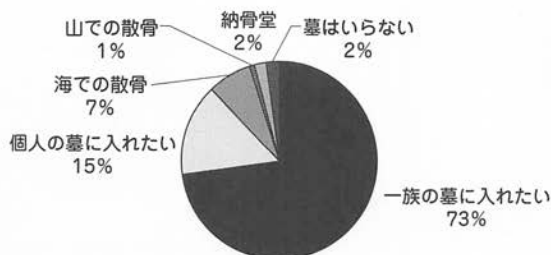
問3 あなたはどんな墓に埋葬されたいか

の墓参りを継続していくか。このよき習慣をずっと続けていつてもらいたいものである。

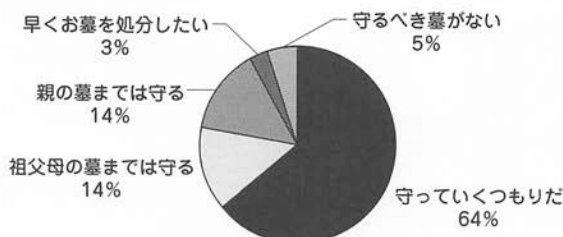
昨今、終活の一環として「墓じまい」傾向が高まっているが、大学生の「墓の継承」の意識についても調べてみた。「墓は必要だと思うか」の質問にたいしては、「絶対必要」「まあ必要」が63%を占め、否定派は9%に過ぎなかったのは意外であった。より詳細に聞いた。

「あなたはどんな墓に埋葬されたいか」。従来の家墓の制度に準じた「親や祖父母と一緒にの墓に入りたい」(56%)がトップで、「自分だけの墓に入りたい」(14%)「海での散骨」(10%)「山への散骨」(6%)「墓はいらない」(12%)を凌駕する結果となった。

「あなたは一族のお墓を守っていくか」については、「守っていく」(64%)「祖父母の墓までは守る」(14%)「親の代まで守る」(14%)。先祖供養にたいする意識も高かった。授業を受けているのは、即物主義社会に育った現代っ子である。墓参りよりも優先したいことが山ほどある年頃だ。一般的には若者は墓に無頓着なイメージをもって



問4 あなたの祖父母や両親はどんな墓に埋葬したいか



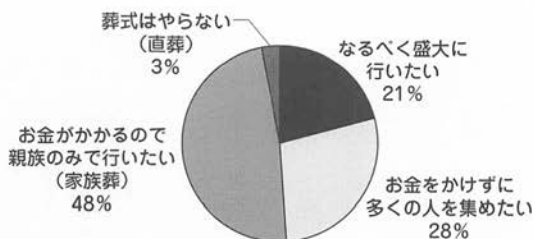
問5 あなたは一族の墓を守っていくつもりか

いたが、それはとんだ誤解だったようだ。ちなみに全国石製品協同組合が2016年に実施した調査では「墓参りは年に2回以上行く」と回答した40代は6割弱。仕事を抱えていると墓参りする余裕もなくなってしまうが、コロナ禍でリモート作業が増え、その結果、墓参りの傾向が高まっていくことも想定できる。

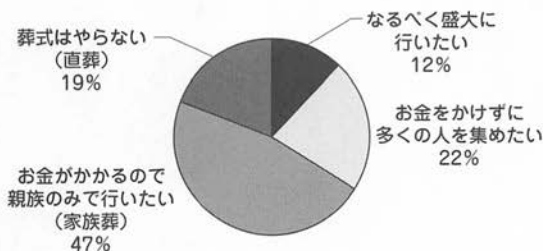
一方で核家族化や長寿化社会になって、とかく、「家族に迷惑をかけたくない」として、墓じまいが増えていく。厚生労働省の衛生行政報告例では、最新の2019年度集計で「改葬」件数は12万4346件。2000年代後半はだいたい7万2000〜30000件で推移していたから、近年、墓じまいが急増していることが分かる。これは葬送の担い手（主に団塊世代、ポスト団塊世代）の死後にたいする意識の変化が読み取れる。実際に墓守りができない物理的な理由もあろうが、老後マネーへの心配や、あるいは将来的な「負担」を子どもや孫に背負わせたくないとの、「付度」もそこにはあるだろう。

今回、アンケートの対象者は、そんな「葬送の現実」

うかい・しゅうとく 1974年京都市生まれ。大学卒業後、新聞・雑誌記者を経て2018年にジャーナリストとして独立。「仏教界と社会との接点づくり」をテーマに活動続ける。最新刊に「お寺の日本地図 名刹古刹でめぐる47都道府県」(文春新書)。東京農業大学・佛教大学非常勤講師、一般社団法人「良いお寺研究会」代表理事。京都教区正覚寺住職。



問6 あなたの親の葬式の規模



問7 あなた自身の葬式

を知らない若者である。純粋に「きちんと死後を弔いたい」という想いが、強く表れているように思う。

だからこそ、若い世代にたいして、「供養の大切さ」を学校や家庭でしっかりと伝えていく必要があるだろう。残念ながら、日本においては公的な教育現場では死の教育はほとんどなされていない。死を学べる機会は、葬式の間くらいなものだが、それも都会では家族葬や直葬といった「閉じられた葬送」によって忌避されつつある。コロナ禍、さらに葬送の形態の簡略化が進む。

「墓参りは必要ない」とする若者が増えれば、将来的に社会倫理は大きく崩壊するのではないかと危惧を覚える。ある学生が、言ったことが胸に響いた。「感謝のこころを忘れずに、お墓に死者の魂は宿るという日本人ならではの考え方は、とても素敵なことだと思います」

コロナ禍での2度目のお盆が終わった。コロナ感染者が急増し、また、猛暑の中であつたが、それでも孫を連れた祖父母の姿もあつた。心をこめて、ご供養を手向けなければと、気を引き締めた。

浄土宗の青年僧侶に伝えたい

ぶつぶつ 放談

仏教×マンガシリーズ最後は「この令和に法然上人をマンガで描いてもうらとしたらこの作家さん！」そして青年僧にぜひ読んでもらいたい一冊と、マンガを入り口にした仏教放談をお届けします。

(聞き手・編集 服部祐淳)

◆登場者◆

佐山拓郎

さやま・たくろう



1975年 東京都台東区生まれ。東京教区・根岸 西念寺所属。大正大学仏教学部卒業。ジブリ原作者の父の影響で、幼少よりサブカルチャーに親しみ、仏教と融合させた法話を実践、Webサイト「ここより」で「ドラゴンボール法話」を連載。また「ドラクエ法話」も行う。著書『流されない練習』（三笠書房・知的生きかた文庫）。今号のおすすめはちばてつやさんの『ひねもすのたり日記』

工藤量導

くどう・りょうどう



1980年 青森県今別町生まれ。青森教区・東津軽郡 本覚寺副住職。大正大学大学院仏教学部仏教学科博士後期課程終了(博士・仏教学)。専門は中国隋唐代の浄土教思想。著書『迦才「浄土論」と中国浄土教―凡夫化土往生説の思想形成―』(法蔵館)。現在、浄土宗総合研究所研究員、大正大学非常勤講師、淑徳大学兼任講師、ひとさじの会理事。時々読み返したくなるマンガは市川春子『虫と歌』

仏教×マンガ ③

大橋雄人

おおはし・ゆうにん



1981年 神奈川県川崎市生まれ。神奈川教区高津・大蓮寺住職。大正大学仏教学科卒業。大正大学大学院修了。博士(仏教学)。大正大学非常勤講師、浄土宗総合研究所研究員、大本山光明寺記主禅師研究所研究員。ほか全国浄土宗青年会幹事、全日本仏教青年会事務局次長なども務める。今月のおすすめマンガは荒川弘の『百姓貴族』

司会 最澄と空海をモデルにしたマンガ、『阿・吽』や親鸞を描いた『歎異抄』が講談社から発売され人気を博していますが、法然上人を題材にしたマンガは浄土宗発行のものを除けばあまり見かけません。

もし法然上人をマンガ化するならどの作家に描いてもらいたいですか？

工藤 「近代の法然上人観」を研究している先輩がいるのですが、時代によって求められる法然像が微妙に変化しているそうなのです。例えば『四十八巻伝』は史実に加えて、鎌倉時代に求められた法然像が描かれているようですが、確かに時代によって若干の脚色がなされる部分があるようです。

その延長線上で、では現代で表現するならどうだろうと先輩と一緒に考えてみたら、やっぱり、絵巻ならぬマンガになるわけで、先輩と大真面目にどなたに描いてもらおうかと話

し合っているとところです。令和の法然上人像を描いて欲しいのは誰か、ですね。

大橋 『阿・吽』がこの前最終回を迎えたので、最澄、空海に続いてぜひ、おかざき真里さんに描いてもらいたいですね。

佐山 クールな仕上がりになるでしょうね。私は浦沢直樹（『YAWARA』『20世紀少年』など）に期待したいですね。作家の個性が出すぎる可能性はありますが（笑）。

数年前にマンガ家が仏像を描く展示会（漫画家による仏の世界展）にも参加していて、「わらし地蔵」を出品されていました。

工藤 他の人が絶対しないアプローチで描いてくれる可能性がありますよね。なおかつポップに売れ線に。その点では面白そう！

佐山 攻めるなら福本伸行（『カイジ』など）も面白そうですね。きっと圧倒的挫折から物語が始まりますよ（笑）。

工藤 もう往生がギャンブルになっちゃいそう（苦笑）

大橋 確かにあまり重すぎない作風の方がいいですよ。カイジは攻めすぎですが（笑）

工藤 私は昔からよしながふみ（『大奥』『西洋骨董洋菓子店』など）に描いてもらいたいと思っていました。女性の視点から法然上人を描いてもらった方が今の時代にフィットすると思っていて、実は法然上人はモテモテだったというコンセプトです。とはいえ、色恋沙汰ではなく、どうしても好かれてしまうという人柄をうまく出せればと。

もう一人は川原泉（『笑う大天使』など）を推したいですね。少女マンガの重鎮中の重鎮みたいな方です。もともと物語が哲学調なのですが、少女マンガが醸すタッチの軽やかさで深い内容をさらっと落とし込めることができます。

佐山 確かに女性作家さんの方が肩の力が抜けていたり、どこか達観している作風ですから、宗教家という重めの題材を描くにはあっているのかもしれませんが。私はバリバリの少年マンガ派なのでその発想はなかったです。でも、ガチガチに力入れて、ザワザワしながら往生を目指す福本法然は見たくないですね（笑）。

女性作家なら高橋留美子（『うる星やつら』ほか）はどうでしょう。きつとすごい取材して面白く描いてくれそう。

工藤 この話は先輩に伝えておきますね！
司会 令和の法然像、ぜひマンガで実現してほしいです！

次は仏教マンガには属していないけど、実はそう読める一冊を。

佐山 中道を表しているいいシーンを『美味しんぼ』に見つけました。「とんかつ慕情」

という回で、偉くなった社長さんが学生時代に食べていたとんかつ屋での話です。

その女将さんが、「いいかい、このとんかつを食べて偉くなるのだよ」って後の社長さんを励ますのですが、女将さんをご主人の大将が、「偉くなる必要なんてないのだよ、とんかつをいつでも食えるぐらいになりな」って諭すのです。

人間、偉すぎず貧乏すぎず、丁度よくってまさに中道であり、小欲知足も含まれていきますよね。その後、店が閉店すると聞いた社長が、そのとんかつを再び食べて初心を思い出すのですが、とても心地よく読めます。

工藤 仏教を感じるマンガって結局、仏教を学んだ人が「これは仏教マンガ」だっと思えばそうなるのですよね（笑）。仏教は多様性に富んでいて、日本の宗派だけでもこれだけあるのですから、それぞれの視点で見れば何

とでも結び付けることができるでしょう。

大橋 セリフだけでも、ちょっと仏教語が登場するパターンも増えていきますよね。ライトノベルなどでは「転生」が流行っていますが、「転生」先の世界の住人が仏教用語を使っているとは妙な違和感も覚えます。

工藤 「転生」で言うと、団塊の世代が非科学的なものや来世を積極的に信じない傾向にあると言われますが、我われより下の30歳以下は、比較的、来世を素直に受け入れているように感じます。オウム的事件もタイムリーには知らなくて、スピリチュアル的なものにもさほど拒否感も大きくない。

この背景にはマンガの物語の影響があると思います。ヒットした『君の名は』もそうですが、「転生」、「輪廻転生」、「来世」という要素を、若い世代は物語として自然と受け入れています。ちなみに大学で浄土教美術の授

業もしているのですが、学生には極楽や来迎図よりも地獄が圧倒的に人気ようです(笑)。司会 最後に「お説教のヒントになる」など、青年僧にお勧めのマンガを教えて下さい。

大橋 学生には小林ロクさんの『ぶっカフェ!』を勧めています。お坊さんが営業するカフェが舞台で、日常生活の中の仏教がコミカルに描かれ、仏教語の説明も杓子定規にならず上手だと思います。直接お説教の題材としてではなく、一般の方に仏教がどう受け止められているかを感じ取ってもらい、どう仏教を説くのかを考えて欲しいです。Web上で無料で読めるのもお勧めポイントです。

佐山 私は今だからこそ『キン肉マン』を勧めたいです。1979(昭和54)年に連載が始まりました『キン肉マン』ですが、実は今でもWeb上で連載中の現役マンガです。

キン肉マン二世の話も終わって、今は再び

初代の話に戻ってきています。そこではエリート意識を持つパーフェクト超人たちが登場するのですが、負けたら死ななくてはならないという掟があります。確かに勝ち続けることは誇りですが、つまりは負けて得られる成長はないことを意味しています。

それでもキン肉マンら正義超人は負けを糧にして「友情」「努力」を経て「勝利」をものにするわけです。仏教は「人生は苦」と説くわけですから、負けて、失敗してからどう動くかを読み解いてもらいたいですね。

工藤 必ずしもかっこいいだけがヒーローではないですからね。キン肉マンは何度も負けていて、這い上がる姿に惹かれる。

佐山 新シリーズで面白いのが、負けていった悪魔超人が成長して戻ってきて一緒に戦うのです。その理由が、「正義超人が殺意をもって相手を倒すことはできないだろ、だったら

◆◆◆マンガになった法然上人◆◆◆



『マンガ法然上人伝』

発行…浄土宗出版室

監修…阿川文正

脚本…佐川哲郎

絵…川本コウ

B6変型判 208頁

子どもから大人まで楽しみながら法然上人のご生涯と教えがわかるロングセラーのマンガ本。

「上人の教えをより理解し、その教えに導かれ、充実した日々を送っていただけだと思います」―阿川文正あ

そこは俺たちに任せろ」と。つまりは自ら泥水役を買って出るのですよ。布施の精神にもつながりますし、尊いと感じました。パーフェクト超人のように自分が完璧だと偉ぶったお坊さんにはなってはいけないですね(笑)。工藤 私はこうの史代の作品ですね。代表作の『この世界の片隅に』や『夕風の街 桜の園』やは広島原爆を描いた作品で、映画やTVドラマ化などもされたので皆さんもご存じだと思っています。『さんさん録』という作品は妻に先立たれたおじいさんが妻の書き残した「生活の知恵ノート」をもとに日々を生きていくという話で、ありきたりな日常の大切さをじんわりと伝えてくれます。グリーンフケアにも通じていて、お坊さんとしても考えさせられるシーンが多い作品です。

グリーンフケアの関連ですと志村志保子の『女の子の食卓』と宮川サトシの『母を亡くした

時、僕は遺骨を食べたいと思った。』もすごくいい作品。グリーンフケア業界でも勧められています。前者は食べ物と感情の結びつきをテーマに女の子の人生の一幕を描いたショートストーリー集。人は嬉しい時も、悲しい時も、辛い時も、それでもお腹はすくし、食卓を囲み、ご飯を食べて生きてゆく。それに尽きますよね。後者は亡くなった方と心の中で対話しながら生きていくというコンセプトが、浄土宗発行のエンディングノート『縁の手帖』と合致する部分もあってこちらもお勧めしたいですね。

佐山 もう一冊、1963（昭和38）年の連載開始と古い作品なのですが、『紫電改のタカ』（ちばてつや）を青年僧には読んで欲しいですね。太平洋戦争末期に日本海軍の最後の希望として配備され、防空戦で奮戦した戦闘機「紫電改」パイロットのストーリーです

が、僧侶は命の重さを説くわけですから、戦争で失われた命については学ぶべき必要があると思います。最新のマンガを読み進めるのもいいのですが、昔の作品を掘り起こして自分で探し当てることもマンガの醍醐味です。司会 確かに自分で見つける喜びもマンガの醍醐味ですね。時代によって伝える切り口を変えて人々の心に響かせるマンガからは僧侶も学ぶべき所がたくさん詰まっていると感じました。ありがとうございます。

【新連載】

あなたもお寺の

CIO

(最高情報責任者)

今号から隔月でお寺と情報技術（IT）について連載させていただく、長野教区松本組善立寺の小路竜嗣です。

一般家庭生まれで大学院まで工学を専攻し、出家前は精密機器メーカーに勤めていました。現在は僧職の傍ら、寺社向けITアドバイザーとして活動しています。

今年7月4日に公開された当会Webサイト「じょーど」でもWeb制作を担当してお

小路竜嗣

こうし・りゅうし
1986年、兵庫県伊丹市生まれ。長野・松本組善立寺副住職。信州大学大学院工学系研究科卒業後、リコー入社。結婚を機に退職し、妻の実家である善立寺に入寺。2013年加行成満。現在は経歴を活かし、寺院のIT導入支援や企業への提案などを行っている。

ります。

ここでは、「お坊さんはお寺のCIO（最高情報責任者）」と題し、お寺でも使える情報技術を中心にお話します。

お寺は情報のかたまり

既にお寺ではたくさんの情報が管理・運用されています。

例えば、檀家住所簿を使ってお盆参りをす

る。過去帳で戒名、命日を確認して塔婆を書いたり、御法語集から一節を引用し、法話原稿を作ることも情報を整理・活用している事例です。

そう考えると、お寺が既に膨大かつ多種多様な情報を取り扱っていることが分かります。と同時に、これら情報の「困った部分」も脳裏に色々と浮かんでくるかと思えます。

例えば、名前や住所表記のミス、資料の紛失、久しぶりに檀家さんの家に行ったら、更地だった！ などもありますよね。

また、自然災害により過去帳や貴重な資料が消失してしまうこともあります。

これら情報の「困った部分」を技術で解決するのが情報技術です。

情報技術は人間を置いてけぼりにするものではなく、人間が苦手とする部分を助けてくれるものです。

第一步は情報ガバナンスを考えよう

では情報技術を取り入れよう！というとき、はじめに考えるのは「情報ガバナンス」です。

情報ガバナンスは情報をどのように管理・活用・保全していくかの指針のことで、過去帳を金庫に納めたり、他人には見せないことも皆さまが既に行っていることも情報ガバナンスの一種です。

お寺にあるどの情報を守り、どの情報を活用したいのか。今どんな課題が生じているのかを把握していきましょう。

それが明確になっていくと技術で解決できるところが自ずと浮かんできます。

情報ガバナンスは人の想いがとても重要です。

想いが欠けると上手くないかない

過日、みずほ銀行のシステムが不具合を起

おすすめ
IT
書籍

ファクトフルネス
ハンス・ロスリング著

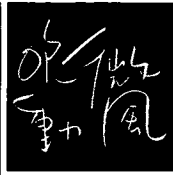
『ファクトフルネスとはデータや事実にもとづき、世界を読み解く習慣』世界の教育や貧困、環境などの問題をデータに基づいて紐解く本です。感覚ではなく、データから客観的に事実を分析する大切さと楽しさを体感できます。



ASIN : B07LG7TG5N

こし、何万人ものユーザーが不利益を被ったニュースをご存知でしょうか。その監査報告書には、不祥事の原因はみずほ銀行の企業体質であると断罪していました。つまり、一流企業でさえ、人の想いが欠如していると技術を取り入れても上手くいきません。

技術はただの手段であり、いつの世でも使う人間に託されています。こういうお寺にしたい。こういうところでミスがあった。困ったことがあった。などをメモ書きでいいので、気がついたときに記録していくことが、一見地味ですがとても大きな第一歩です。



微

風

吹

動

東京五輪

はあー まちにまつた世界の祭り

それ ととんとね

西の国から 東から

あ ちよいとね

北の空から 南の海も

超えて日本へ どんときた

石田一裕

「東京五輪音頭」

昭和三九（一九六四）年十月十日、日本で初めてのオリンピックが開催された。アジア初のオリンピックでもあった。

私が生まれる以前の話であるが、その時代のことを調べてみると、今の違いがいろいろとわかる。当時は葉書が一枚五円、平均年収は約四十万円、モノクロテレビ一台の値段が平均の月収ほどの値段である。一ドルは三六〇円、人口は一億人を超えてはいなかった。日経平均株価は約一二〇〇円である。ちなみに二五年後の平成元（一九八九）年十二月には史上最高値の三万八九一五円を記録し、東京五輪後も日本の経済が成長していったことがわかる。当時のことを覚えている人にとっては懐かしいのであるが、就職氷河期、また後に「失われた二〇年」と呼ばれる時代が人生の半分である私にとって過去の日本を知るのは面白いことである。

昭和二〇年に終戦を迎えた日本は戦後の混乱期があったものの、昭和三二年には「もはや戦後ではない」という経済白書の言葉が流行語となった。その後、右肩上がりに経済は成長し、オリンピックの開催に合わせ東海道新幹線が開通し、その他にも様々な開発が行われた。現在、大本山増上寺の隣にある東京プリンスホテルが開業したのも東京五輪と同年である。その数年前の昭和三三年には東京タワーが完成している。昭和三〇年代は増上寺周辺の景観が大きく変わった時期といえよう。

いしだ いちゆう 1981年北海道稚内市生まれ。神奈川教区光明寺住職。博士(仏教学)。浄土宗総合研究所研究員、大正大学非常勤講師。専門はアビダルマ仏教、著書に共訳『【現代語訳】浄土三部経』(浄土宗、2011)など。

さて昭和三九年の世の中の状況だけではなく、東京五輪と浄土宗のつながりを少し見てみたい。

この年に発刊された本誌十二月号(第三十巻第十二号)では編集後記で「今年も残り少なくなってきた。なんといっても、オリンピックが盛大に無事終了したことは喜ばしい」とあり、翌月刊行された正月号(第三十一巻第一号)では、巻頭の随筆に「オリンピックに明け、オリンピックに暮れた去年でしたが」という一文が見える。日本を挙げての行事に、寺院でもテレビやラジオを通じて五輪に触れた人が多かったであろう。また、実際に関係者の受け容れもあった。

『宗報』五六九号(昭和四〇年一月号)には「オリンピックフランス柔道応援団宿泊を引受けた大本山光明寺」という記載があり、鎌倉光明寺がフランスからの応援団の宿泊所となっていた。

前回の東京五輪は戦争から日本が復興した証であり、またオリンピック景気と呼ばれる好景気を生み出すなど歴史的な出来事として、様々な記憶の人々に残っている。二〇二〇年の東京五輪開催が決定してから、そういった記憶を聞く機会がたびたびあった。またそれを話のタネにし、開催前には高齢者に「二回目の東京五輪を見るまでは元気でいないとね」などといって、笑っていたものだ。

しかしながら二〇二〇年に東京五輪は開催されなかった。周知のとおりコロナウイルスの影響で一年延期されたからである。そして今年開催された東京五輪は、テレビの中での出来事であった。

開催中もコロナウイルス、特にデルタ株が猛威を振るい、その感染拡大は「第五波」と呼ばれた。私が住む横浜では、横浜スタジアムでソフトボールと野球が行われた。開催中、葬儀があり、その近くを通ったが、人通りは少なく、また警備もあって、中の様子はわからなかった。それでも試合はテレビ中継され、両種目の金メダル獲得がニュースで報じられた。五輪の最中、東京に発令されていた緊急事態宣言は、神奈川県などにも拡大され、外出を控えていたからもあるが、五輪関係者とみられる外国人と会うことはなかった。

前回の東京五輪について前述の『浄土』（昭和三九年一二月号）は「あのような気持ちでやって行ったら地球が平和であるだろう」と編集後記に書かれている。今回の五輪を終えて、私の気持ち、そして多くの人々の気持ちは、コロナが早く収束しますように、というものであろう。

雑感だが、今後誰かが私のように、浄土宗教師が今回の東京五輪をどう受け止め、寺院でどんなことがあったかを調べるかもしれないと夢想し、東京五輪の話題を一つの記録として書き留めておく。

式内遺

親子文

王

連載
小説

その
6

絵

啞々砂

石丸晶子



いしまる・あきこ 1935年東京生まれ。東京大学文学部、同大学院博士課程修了。近代文学を専門とするが、日本古典の著作も多く、1991年、『式内親王伝（朝日新聞社）で紫式部文学賞を受賞。東京経済大学名誉教授。著書に『お手紙からみる法然さま―そのお人柄』、短編小説『月影の使者』（ともに浄土宗出版）など多数。

師父にはあの日、八条殿ではじめてお会いしてから、その後も女院様主催の法廷や伯母の上西門院統子様の仏事の席などで何度か見えた。私の心に師父が深くやどつていかれるのに時間はかからなかった。

師父は痩せてはおられず、どちらかといえば太り型の体軀。頭頂はいくらかくぼんで角があり、黄色味をおびた御目にはやさしい光があった。眉の、お鼻や口元の、何というおやさしさであつたらう。しかし私は、御傍らに、ここにいたるまでの修行の厳しさと苦悩の深さを直観していた。

そこには、私が幼いころから見なれた、宮中に出入りする公家たちには求められぬ輝きがあり、犯しがたい気品と慈愛があつた。

ああ、それはまさしく、恐ろしい乱世に生をうけ、身も心も、恐怖でかたく閉ざされていた私にとって、心の奥底でなぐなくながく待ち望んだ出会ひであつた。

私の心身は、氷を解かすあたたかい春の光

に逢つて、ようやく、息を吹きかえしはじめたのである。

今の私にはわかる。私は恋をしる女になっていた。人生の空しさにうちのめされ、感情を失い、死んでいるかのような人間になつていた私は、生きている人間になつていた。

以来、日ごと夜ごとにふかまるのは東山大谷におられる師父のことばかり。その御胸にいだかれないと、時には心中、熱く身を焦がし、人の世を生きてきた悲しみも苦しみも、おそれも慄きも、その一切を御膝元に泣き伏してうつたえたかつた。

—不信心者の私は、今まで、いかに高位の御僧から教えを聴聞しても、信じる心がわいてこない不信心者でございました。けれども法然房様から伺うみ教えは、ふかく深く心にしみ透るのでございます—

—師父は今、どこで、何をしておられるであろう。おお法然房様、師父のお側で、ご一緒に生きるところにこそ、私一生の充実と幸せがあります。しかし、なぜ、そう生きること

はできないのでしょうか―

―なぜ、天皇家に生まれた女が人を恋したり、夫をもつことは許されないのでしょうか。周囲をみわたせば、皇統の血をひく者のほとんどが、政争をさけるためだといって男は僧侶に、女は齋宮・齋院、そして尼となつて孤独裡にすごしている。私も人を恋し、人に恋されて生きてみたかつた―

―否、何という妄念、おろかさであろう。師父は二十五年の長くきびしい修行のはて、一切衆生救済の道があることにお気づきになり、教えをつたえるために山を下りられた。東山の草庵では今日も、訪れるすべての人びとに道を説いておられるというのに。何と独りよがりなことを私は―

気がつくつと、月並みの歌しか詠めなかつた私であつたのに、ひとりでにことばが和歌となつてあふれていた。

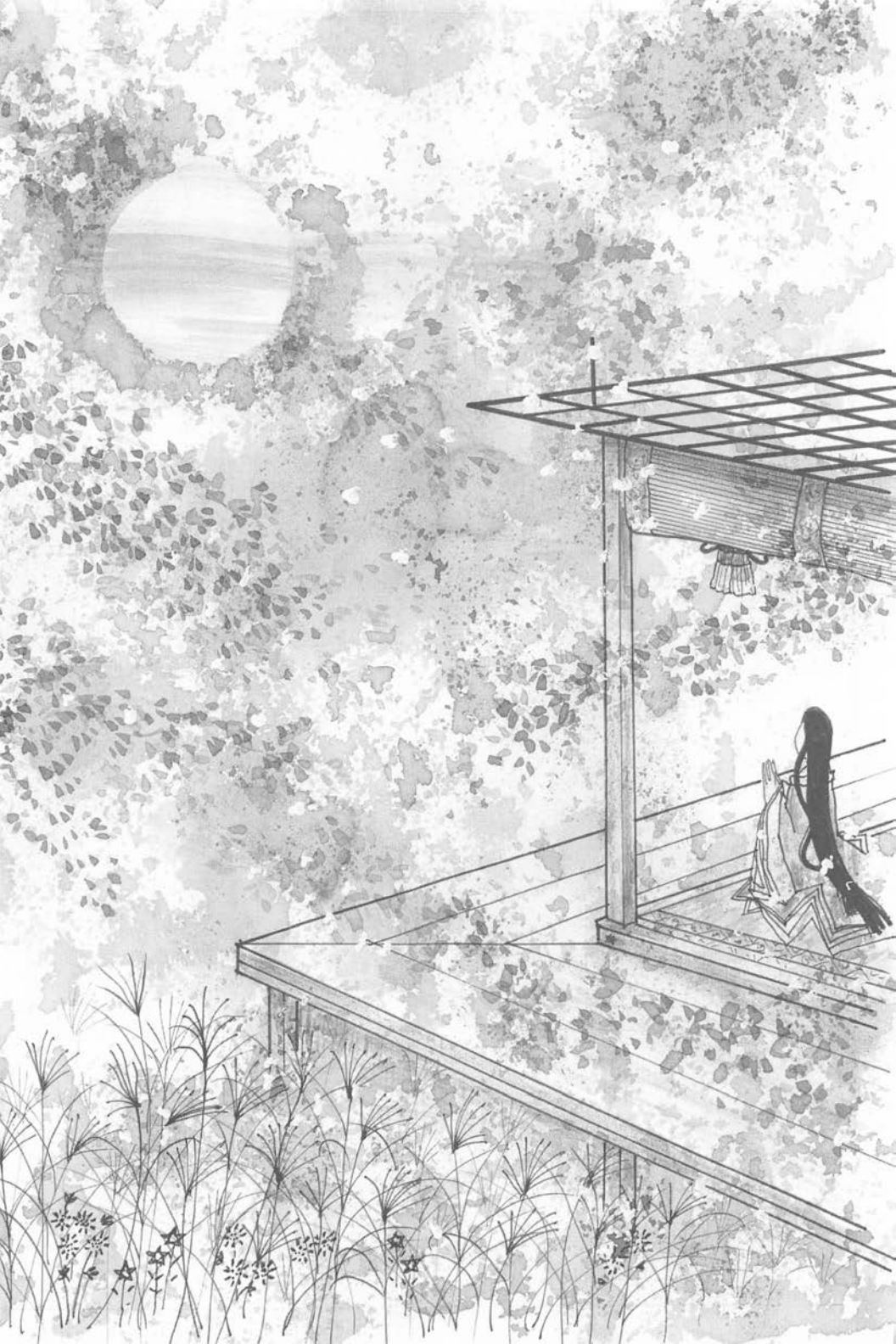
尋ねべき道こそなければ 人知れず
心は馴れて 行きかへれども

知るらめや 葛城山に ゐる雲の
立ち居にかかる わが心とは
あはれども 言はざらめやと 思ひつつ
我のみ知りし 世を恋ふるかな

師父をお尋ねしようにも、その御許へゆく方法がない。私の心は誰にも、そして師父にさえ知られることなく、すっかり師父になれ親しんで、そのまわりを行つたり来たりしているのだけだ。

師父よ、ご存じでしょうか。あの葛城山にいつもかかつている雲のように、立ち居につけて、いつも師父のことをお願い申し上げている私の心を。

師父のことをお慕いしつづけているこの心を、もしお知りになつたとしても「愛しい」などとは仰せにならないであろうと思ひながら、心中ひそかにお慕いしつづけてきたこの年月を、私自身、慕わしく思っていることだ。



いくらお慕いしても、私自身が法苑をひらいて師父をお招きしたり、東山の草庵をお訪ねすることはできなかった。自身の住居というものを持つていない私は、叔母の八条女院様本邸の一角に住まわせていただいている身であつたし、無力な者であつても齋内親王という身分だけは高く、自由に町中に出ることはできなかった。

師父に見える何度とないおりごとに、想いはつのも、自由にお目にかかれぬまま、想いは心の中にせきとめられてむれかえる。そのむれかえる熱い想いによつて、しかし私自身は深められ、養われていったと思う。想いのなかでは師父との対話は自由であつた。

見えつるか 見ぬ夜の月の ほのめきて
つれなかるべき 面影ぞ添ふ
恋ひ恋ひて よし見よ世にも 有べしと
言ひしにあらず 君も聞くらん
君ゆゑと いふ名は立てじ 消えはてむ
夜半の煙の すゑまでもみよ

私のことが師父の夢に現れてしまったのだらうか。窓辺にさしこむ月の光に、何か師父のことをほのめかすような影が映っている。これは月が光にそえて、私をうけいれず、つれないに違いない師父の面影を、送っているからであらうよ。

お逢いすることもなく、私はただ恋しくお慕い申しあげておりますが、それはさておき、今後私がどうなるかご覧になつてください。私は「今後も生きていきます」、などと言つたものではありません。このまま生きていてはいけないと思つております。このことは師父のお耳にも入つておられることでしょう。

心身を焼きつくすこの恋のために、私は焦がれ死にいたします。しかし師父よ、それはあなたのせいであつた、などという浮名が立つようなことは決していたしません。ただどうか、恋に死んだ私を焼く煙だけは、最後の最後まで見届けてくださいませ。

師に告白するすべとてない胸の内を、ひたすらことばにたくす年月がすぎていった。苦しい歳月であつたけれど、恋を知つたことによつて、どんなに心が深められ、培われたか計りしれない。四季折々のすがたは、新しい装いを以つて心に映るようになっていた。

はかなくて すぎにし方を かぞふれば
花に物思ふ 春ぞへにける
松かげの 岩間をくぐる 水の音に
涼しくかよふ ひぐらしの声
夏くれて 今日こそ秋は 立田川
風の音より いろかはるらん
真木の屋に 時雨は過ぎて 行くものを
ふりもやまぬは 木の葉なるらん

儂い身の上のまま、過ぎて行つた今まで
の年月をあれこれ思いながら数えてみると、
花を眺めては物思ひをする春を、何度も経
てきたことだ。

松の木陰に岩が見える。その岩の間をくぐり流れる水の音に、蜩の鳴く声が溶けあつてひびいてくるよ。

きのう、夏の最後の日が暮れていった。そこで立秋の今日からは秋になつた竜田川よ、お前はむかしから美しい紅葉で名高いけれど、まずさいしよに、秋風の音をきいて紅葉しはじめるのだろうね。

真木で葺いた家に何かが降りしきる音がする。時雨は通りすぎてゆくのに降りやまない。時雨ではなくて木の葉が降る音なのだろうか。

ただ一途に師父を想いつづけて二年あまりが過ぎていた。

その私に、突然、思いもよらぬ噂がふりかかつてきたのは、文治五年（1189）の冬である。

八条女院様と三条姫宮が、このところ長く病いに臥して病状思わしくないのは、私式子が別のことにことよせてお二人を呪詛して

るからだ、という。

女院様は父後白河の異母妹で、鳥羽天皇とこうごうびふくもんいん皇后美福門院とのあいだに釈迦誕生の日にお生まれになった方である。

ご両親様から深く愛され、期待されてお育ちになった。

また、この案は直前になって実現しなかったけれど、弟君近衛天皇が若くして崩御された時と、安徳天皇が平家によつて西海に落ちた時と、いかれた時の二度、女帝として皇位に押されたほどの隠然たる実力者であった。

お邸にはさまざまな階級の人びとが出入りして日々、にぎやかに過ごしておられたけれど、それというのも、何ごとにも拘泥せぬおらかなお人柄に加えて、天皇家を超える膨大な財産八条院領をはちじょういんりやうご両親様から相続され、きわめて裕福であられることがあつたと思う。私の十二歳お年上であつたから、当時、五十代の半ばであられたらうか。

父法皇も、この女院様にはお譲りになるところがあつたのである。

また三条姫宮のほうは、先の戦乱でうち死にした弟以仁王と、女院様に近侍してその信頼はなはだ厚い三位局とのあいだに生まれた姫で、女院様は天皇家の血をひく皇子女や高級貴族の子女たちを何人も猶子ゆうしにしておられる中でも、生まれるや猶子にして手元でお育てになつたこの姫宮を愛おしまれるお心は格別に深かつた。

お住まいの八条殿（＝現在のＪＲ京都駅周辺）周辺は、幽邃な洛東白河近辺とはことなり民家が立ちならんでいた。武具屋をはじめ番匠ばんしやう、塗師ぬし、檜皮屋ひかわや、紺屋こんやなどといとなむ雑人が暮らしていて、彼らのなかには何ごとにつけ鷹揚な女院様のお邸に気軽に出入りする者もいた。

お邸に仕える女房たちにも規律というものがなかった。その結果、広大ではあつてもお邸はとり散らかり、お仕える貴族や侍たちも、好きなときに気ままにお仕えする、という風であつた。

いっさいお構いなしの鷹揚な御方であつた

のである。

そのような女院様のお邸に出入りする雑人たちが、

「女院様と姫宮が、先ごろから咳や熱がでていつこうに快癒せず、長く病の床に臥しておられるのは、居候の齋院が、他のことにことよせてお二人を呪詛しているからだ」

という噂をながし、噂はまたたくまに八条殿全体に、そして洛中にひろまったのである。陰陽道と密教信仰でなりたつ貴族社会にあって、呪詛のうわさを立てられることは致命的であつた。

しかしなぜ、根も葉もないこの噂が私にむかつて立てられたのか。

考えてみれば、一切おかまいなしのにぎやかにとり散らかつた八条殿にあつて、離れに間借りしている私の住まいは、周囲から浮いた存在であつたと思う。

私・齋内親王家を早くから取りし切つてくれている定家の姉の大納言局は、住まいがとり散らかるのを好まなかつた。下仕えの男女

には朝夕掃除をさせ、数人いる侍女に対しては彼女たちが気ままに仕えることを許さなかつたし、私が女院様から借り住まう一角に、町屋の雑人たちが勝手に出入りすることも許さなかつた。

八条殿全体から見れば私の周囲はそこだけ浮いていたのである。

信じる心のうすい私とは異なり、万事に信心深い女院様が、はなはだしくお怒りになつたのは当然であつたと思う。

やがて回復された女院様は父法皇に、

「院に依頼されて、私は平家の都落ち以来ずっと齋院をお預かりして、ずいぶんお世話をしてきたつもりだけれど、こんな仕打ちをして返すとは何というお方でしょう。恩を仇で返す方とおなじ邸内に暮らすことはできません。齋院はお返しいたします。後は院のほうでお引きとりください」

と申し出られた。

私は八条殿を退出しなければならなくなつた。突然のことであつた。

(つづく)

江戸 日本の 街道 探訪

家康の
全国道路網
造り

第八回

東海道(6) 最後の難所、
鈴鹿峠を越えて草津まで

森清鑑



四日市から鈴鹿峠を越え、草津宿までの東海道の西路は、街道の中でも昔から最重要視されている、言わば交通の要衝であった。家康はこのラインを第一に整備。四日市から草津の間(77・5キロ)に八つの宿場を設け、整備の充実化を促進した。とりわけ亀山宿、関宿、坂下宿などは、鈴鹿越えの助走路でもあり、繁栄。

四日市宿

桑名から約13キロ西にある四日市は、広い平野部に醸成された商業地。お伊勢参りの伊勢街道への出発点でもあり、交通量は盛ん。四日市は、毎月4日、14日、24日と四のつく日に市が立っていたためついた名である。幕府は、この発展する商業地を重視し、この地を幕府直轄の天領地に指定した。東西の鈴鹿ルートと縦の伊勢街道の交通量は大きい。宿場は発展し、本陣2、脇本陣1、旅籠屋98を数える。宿場を出て南に下るとすぐに有

名な日永追分ひながに出る。この追分こそが東海道と伊勢街道の分岐点である。伊勢街道は、ここより伊勢湾に沿って伊勢神宮まで南に下る。追分には伊勢神宮、二の鳥居が立つ（桑名に次ぐ）。お伊勢参り参詣者と別れ東海道の旅人は右に転じる。東海道は鈴鹿山脈から伊勢湾に流れている鈴鹿川に沿って敷設されている。石薬師宿、庄野宿という比較的小さな宿場を経由し、やがて亀山宿へ着く。四日市から亀山宿まで24 km、6里。

亀山宿

東海道は亀山城を取り巻く形で通過する。亀山城に近づくくと江戸口門があり、潜って右に曲がる。城郭に近づくくと左手に亀山宿脇本陣椿屋、その先に亀山宿樋口本陣がある。立派な本陣。宿場は亀山城に沿って存在。本陣1、脇本陣1、旅籠屋21と比較的小規模である。国貞の絵は亀山城郭の崖下を通る東海道大名行列の姿を捉えている。

関宿

亀山宿を抜けると西へ5 kmも行けば関宿に着く。此処まで来ると鈴鹿山脈の臭いがしてくる。関宿は山裾前の平地にあるが、此処は古代からの軍事要衝の地であった。関宿の関は、670年頃、軍事上の目的で設置された「鈴鹿の関」を意味する。当時、日本三関のひとつであった。この地に家康は東海道47番目の宿駅を整備する。大和街道、伊勢別街道とも繋がるため、宿場は重要な拠点となる。本陣2、脇本陣2、旅籠屋42（関宿は、江戸



国貞：東海道亀山：
城下を通る大名行列

当時の宿場の賑わいを彷彿とさせる町並みが東海道で唯一残されている。宿場の東端にある追分からは伊勢別街道が繋がっている。京都、大阪方面から東海道を歩いてきた伊勢参りの人達は、ここから右に曲がって伊勢へ向かった。そのため、この追分には、伊勢神宮の鳥居が立ち、常夜灯が設置されている。

鈴鹿峠

関宿の西門を出ると、すぐに追分がある。ここは、東海道と奈良方面に行く大和街道との分岐点である。奈良に行く旅人は左に曲がる。東海道を行く人は直進。東海道は関宿を過ぎると、鈴鹿山系の丘陵地帯に踏み込む。

鈴鹿山脈と鈴鹿峠

鈴鹿山脈は滋賀県琵琶湖東から三重県までの縦の山脈である。そして鈴鹿峠は山脈の南端の、山

広重：坂の下、筆捨嶺。茶屋で寛く旅人。鈴鹿の風景を彷彿とさせる。



脈の中では最も低い位置で山脈を東西に横切る、言わば峠道。東海道は緩やかな山道に入る。しばらく行くと鈴鹿の切り立つ山々が眼前に現れる。絶景である。するとそこに一軒の茶屋が現れる。次の坂下宿までのほぼ中間にある、立場茶屋。旅人は一様に茶屋で休み、眼前の景色を楽しんでいる。豪快な景色である。旅人が見とれている、眼前の谷を隔てて在る奇岩の山は、岩根山。奇岩を縫って幾筋もの滝が流れ落ちている。深山幽谷。この山を通称、筆捨山という。室町時代の絵師、狩野元信はこの山の姿を描こうとした。しかし、すぐに雲や霞みが立ちこめ、山の姿が目まぐるしく変化。ついに絵が描けず筆を捨ててしまった。この故事から人々は岩根山を筆捨山、茶屋を筆捨

茶屋と呼ぶようになった。広重は、この風景を見事に表現している。関宿から坂下宿まで5・3キロ。ここは坂下宿寄りの処である。

坂下宿

坂下宿は鈴鹿峠の登り口にある。距離は短いがこの峠越えが難事であったため、旅人の多くが坂下宿に宿泊。翌朝から峠越えとなる。ために宿場は、この地形からは想像できぬほど繁栄した。本陣3、脇本陣1、旅籠屋48。街道に沿って坂下宿松屋本陣、大竹屋本陣、小竹屋脇本陣などを中心に旅籠屋がひしめく。

坂下宿を出ると、しばらく山肌を縫う、平らな道が続くが、右手に岩屋観音が見える、あたりから右上に登る山道に入る。するとすぐに片山神社。豪壮な神社である。そしてここが鈴鹿峠の登り口となる。

鈴鹿峠

片山神社から鈴鹿峠に登る、僅かな道程が険しい山道で、箱根に次ぐ難所といわれた。この間、石畳にはなっているが、「鈴鹿の山は「八百八谷」、長く険しいジグザクの山道は8町（900m）、27曲り」といわれていた。漆黒の森の中、くねくねし曲がる、坂道の連続。古代から開通された道で、盗賊が横行する峠として知られ、坂上田村麻呂の群盗退治の話など幾つかの伝説が残る。峠の頂上に達すると視界が開ける（標高378m）。そこに巨大な万人講常夜灯が立っている。高さ5・4m、重さ38tに及ぶ石灯籠で、江戸中期に四国金比羅宮講中が建立したものである。急峻な峠に登り切った旅人はここで休息し、さぞかし、ほっとしたことだろう。

土山宿

鈴鹿峠を越えるとゆったりとした下りが続く。土山宿に到着。この宿の絵はどの絵も雨降りの図

である。伊勢湾から吹き上げてくる風が鈴鹿峠を越えると雨になるため、とにかく雨が多い。「坂は照る照る鈴鹿は曇る、あいの土山雨が降る」という馬子唄があるくらい。広重は土山宿に到着寸前の大行列の姿を描く。雨、雨。一行は菅笠を被り、茶色の合羽。雨は黒い線で画かれている。もうひとつの「土山…ずずか山中の図」では、雨を白線で描く。難しい画法を駆使。この絵では、土山宿から逆に鈴鹿峠に登る旅人の姿が描かれ、彼らのくるぶしは泥中に埋まっているのである。そのくらい、雨で土がぬかるんでいた。難行の場面である。

土山宿の規模は、本陣2、旅籠屋44。宿場に入る手前に一里塚があり、右手を見ると田村神社。これは千手観音の加護により、鈴鹿山に巣くう群盗を討ち果たした坂上田村麻呂を祀った古社である。

水口宿

みなぐち



広重：東海道五十三次土山鈴鹿山、雨で泥濘の道を鈴鹿峠に登る旅人。土山宿から江戸に向かって雨中、鈴鹿峠へ登る。険しい景色がよく分かる。

東海道は、野州川に沿って西へと進む。甲賀の里を抜ける。この間、12キロ。水口宿に到着。家が伝馬制度を定めてから宿場町として発展。本陣1、脇本陣1、旅籠屋41。江戸期、小堀遠州によって水口城が完成し、城下町の中に宿場が存在する。

石部宿

ここから西へ約11キロ行くと石部宿に着く。幕末には商家216軒、旅籠屋62軒までに発展した。

広重：草津：繁盛する大型立場茶屋と往来を
行き交う、早籠、大きな荷物籠



広重：草津矢ばせの渡し口。
琵琶湖を帆船が行き交う。

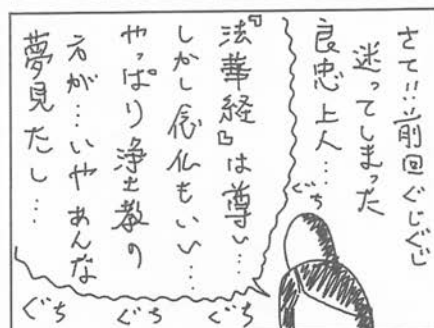
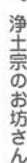
草津宿

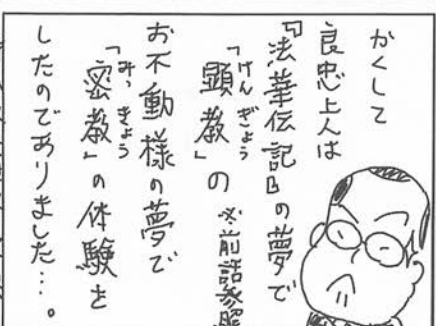
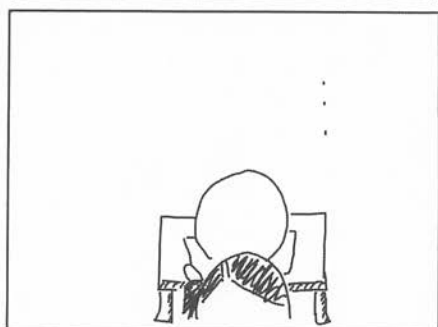
さらに西へ10・5キロ。ついに草津宿に到達する。琵琶湖の東側にある草津は、室町時代足利將軍が草津御所を設置した頃から東海道、中山道の交通量が増加。そして戦国時代には、軍馬の往来が最も激しい処として知られた。ために家康は東海道宿駅制度で草津を重要な拠点として整備する。なにしろ、草津は、東海道、中仙道、琵琶湖廻り

の矢橋街道^{やばせ}の分岐点でもあり、江戸時代の交通量は郡を抜いていた。そのことを象徴するかのよう
に広重は大きな茶屋の前を通る、4人掛かりの早籠と大きな荷物籠（年貢米）を4人で担ぐ人足の姿で表現。大きな茶屋と各種籠の交通で草津宿の物流繁栄の様を著している。草津宿の規模は大きく、本陣2、脇本陣2、旅籠屋72軒。

草津宿から大津宿までは14キロ。草津宿の西端京都側出口から右を見ると、琵琶湖の矢橋^{やばせ}の渡し場が見える。歩きを嫌う旅人は、ここから舟に乗り、大津宿松本石場まで、湖水の旅。琵琶湖の美しい景観を楽しみながらの船旅（8キロ）を洒落こむ。

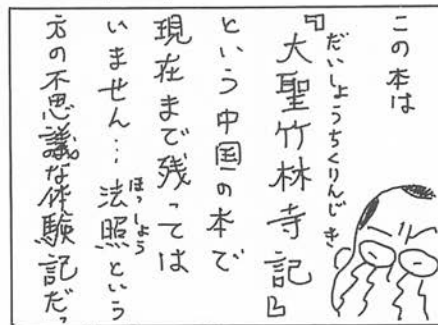
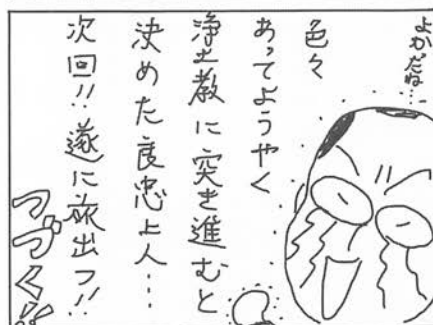
もり せいかん
1941年東京生まれ。大学卒業後ドイツ系
商社に入社。その後、海外情報、広告・マー
ケティング調査・分析、インフォメーション
オンデマンドサービス事業に携わる。廃業
物関連調査 Mori & Associates 主催。





当時仏教は頭教と密教とを区別していませんでした。

※ノ日にノ石遍称えたのこと...



よんでみたんだ...

編集後記

巻頭は当然上人鑽仰会設立の立役者、真野正順上人のアーカイブです。アーカイブではありませんが、しっかり人となりを書き彫りにしています。また、写真も書斎でのカットながら、新アングルの一枚になっています。上人には曾孫にあたる天光院の真野威人住職のご好意によるものです。

当会の発足当時は仏教界にとっては大きな過渡期でした。浄土宗との連携の中で設立、当会ならではの役割を果たした足跡をご覧ください。

「あなたもお寺のCIO」を表紙目次に入れました。このままだと何のことかわからないかと思ひCIOに(最高情報責

任者)を加えました。この言葉、最近ニュースで聞くものの、その意味は。かく言う私も? 隔月の新連載の著者は当会新HPのキーパーソンの小路竜嗣師。これからのお寺のための便利な環境創りの企画です。言葉は難しくても簡単にできることをお勧めしています。

「寺々刻々」は著者、鶴飼秀徳師が一般大学で行ったアンケートの結果分析。テーマは「死生観」。

二十歳前後の一般の若者が死をどう捉えているのか。お墓をどう思っているのか。お寺にとっては知っておくべきことです。どうぞお読み忘れなきようお願い致します。

(村田洋一)

編集長 編集部員

デジタル編集部員

村田洋一
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
平井泰代子
本原克道
服部祐淳
小路竜嗣
赤坂明翔

雑誌『浄土』 特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(大本山 清浄華院)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
加藤昌康(下北沢・森巖寺)
河本悠大(函館・称名寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
坂田良仁(文京・十方寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤久雄(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良昌(塩釜・雲上寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
成田昌憲(世田谷・大吉寺)
野上智徳(静岡・宝台院)
長谷川岱潤(東京・戒法寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多将敏(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
水科善隆(長野・寛慶寺)
(敬称略・五十音順)

ホームページ jodo-sangou.org
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

浄土

八十七巻 十月号

昭和十年五月二十日第二種郵便物認可

印刷 令和三年九月二十日
発行 令和三年十月一日

発行人 佐藤良純

編集人 長谷川岱潤

印刷所 株式会社 映印刷

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四七四明照会館四階

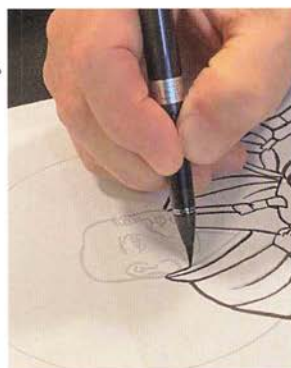
発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三・三五七八六九四七
FAX 〇三・三五七八七〇三六
振替 〇〇二八〇・八・八二八七

写シリーズ

便利で書きやすいA4版の奉書で、
誰でもできるなぞり書き仕様です。



写仏

阿弥陀三尊、薬師如来、地藏菩薩、法然上人
1セット6枚の5組入り 5000円

写経

浄土宗日常勤行式(三奉請版、四奉請版)
1セット12枚の5組入り 6000円

写詠歌

宗歌「月かげ」と法然上人四季の御詠歌
1セット5枚の5組入り 3000円

書籍シリーズ

『浄土』連載の単行本から書き下ろしまで、
読み応えのある本をお届けします。

『浄土・念仏読本』復刻版

2000円

『和英対応 法然上人のお言葉』 梶村 昇著、川西良治訳

1000円

『浄土の道』 真野龍海著

1700円

『差し出し人は法然さん』 袖山榮輝・林田康順・小村正孝共著

600円

『響流十方』 袖山榮輝・林田康順・小村正孝共著

600円

『響流十方』 其の二 袖山榮輝・林田康順・小村正孝共著

640円

※表示価格は定価で税別となります。

ご購入とお問い合わせはこちらへ

ほうねんしょうにんさんこうかい

法然上人讃仰会 105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階

TEL 03-3578-6947 FAX 03-3578-7036 Mail hounen@jodo.ne.jp HP jodo.ne.jp

浄土

じょ~ど

法然上人鑽仰会の
新ホームページ
「じょ~ど」
を開設しました

【目的】

- 一、Web 時代に寄り添って
- 一、鑽仰会の新しい役割の窓口に
- 一、浄土宗寺院の明日のために
- 一、新サポーターを募ります

【特徴】

- 一、『浄土』のバックナンバーが創刊号から読める
- 一、Web版ならではの記事と企画を楽しめる
- 一、SNSと連動し各種情報の交換もできる
- 一、サポーター窓口と刊行物購入窓口にも

**百聞は一見にしかず、
QRコードからご覧下さい！**

ホームページのQRコード



jodo-sangou.org

フェイスブックQRコード



[http://facebook.com/
sangokaihonen/](http://facebook.com/sangokaihonen/)

ツイッター QRコード



[http://twitter.com/
sangokai_honen](http://twitter.com/sangokai_honen)